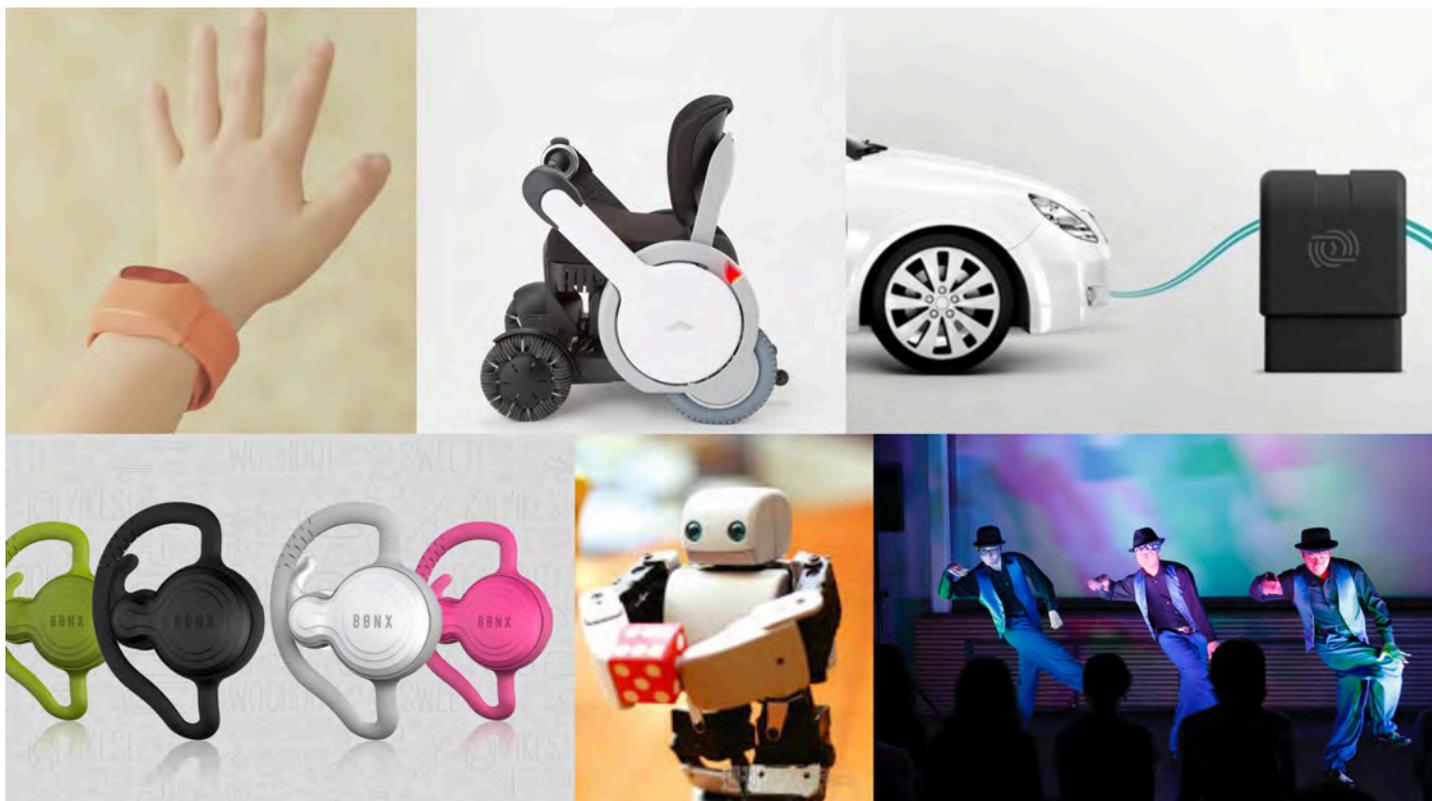


日本ブランド発信事業 - 日本のIoTプロダクトとそのアプリケーション開発について

2016年7月
「日本ブランド発信事業」専門家
プログラマー 堤 修一

事業概要

WHILL、Moff、BONX等、私がiOSエンジニアとして開発に携わったIoT（Internet of Things）分野の日本の魅力的なプロダクトを紹介しつつ、IoTにおけるキーテクノロジーであるBLE（Bluetooth Low Energy）を利用したアプリケーション開発の基礎と実践について、それらの具体的なプロダクトを例に用いて解説する講演を行いました。



（アプリ開発を担当した日本のIoTプロダクトの例）

訪問国はイスラエル、パレスチナで、計4回の講演を行いました。参加人数はそれぞれ20～40名程度。ニッチなテーマのため人数は多くはないものの、しっかり細かい質問や意見を拾うことができちょうど良い人数だったと思います。

講演やインタビューの合間の空き時間を利用して、聴講者のオフィスに訪問してより詳細な問題について

議論したり、聴講者の共同創業者とのミーティングを別途実施したりもしました。これらについても後述します。

講演1: アズリエリ工科大学 / エルサレム

滞在初日の7月25日（月）、イスラエルのアズリエリ工科大学および同学内にワークスペースを構える AtoBe Startup Accelerator を訪問しました。

まずは代表のミハエル氏より同アクセラレータプログラムについての説明があり、投資先のプロダクトをいくつか紹介していただきました。BLEを利用したホテルの自動チェックインサービスや、ドローンの充電拠点等、いずれも興味深いものでした。



次に同カレッジの教授の案内で、カレッジ内の製薬関連の設備を案内していただきました。世界でも大きいシェアを持つイスラエルの製薬会社 Teva Pharmaceutical Industries の協力により、同カレッジは非常に多くの製薬関連機材を取り揃えており、これはカレッジ生にとってもAtoBeのアクセラレータプログラムに参加するスタートアップにとっても、他の環境では真似をしづらい大きな強みになると感じました。



その後、カジュアルな雰囲気の中、レクチャーを行いました。



参加者はiOSプログラマだけではないだろうと予想し、ある程度専門的ではありつつもプログラムのソースコード等はなるべく用いないように解説しましたが、公演後の質問は実際にBLEを用いたiOSアプリを開発しているであろう質問が多かったです。そこから鑑みるともっとiOSアプリ開発の面で踏み込んだ内容の方が喜ばれたかもしれません。が、事前にそこを推測するのも難しいので、質疑応答で十分にフォローできる参加人数で良かったと思います。



私の前に登壇されたJETROの高木様によると、本イベントではさまざまな人種や宗教の方が隣り合ってレクチャーを聞いていたとのこと。エルサレムは歴史的・宗教的に複雑な背景を持つ地ですが、こういった技術やものづくりの話においてはそういう壁もなくなるのだなと印象に残りました。

講演2: Google Campus / テルアビブ

滞在2日目の7月26日（火）、テルアビブ市内のGoogle Campusにて講演を行いました。平日の午前中、しかも翌日にも同市内で開催ということで参加者が集まるのか懸念もありましたが、結果的に20名以上の参加者が集まり、熱心にレクチャーを聞いていただけました。



質疑応答も盛り上がり、講演後も入れ替わり立ち替わり個別の質問や相談を受けました。



この日名刺交換した方々からは「講演資料を送って欲しい」「より詳細に相談したい」といった多くのメールをいただきました。

GreenRoad社訪問

Google Campusでの講演に同社のモバイル部門のマネージャが参加されており、BLEを利用したアプリのバッテリー消費に関する質問をもらったものの、**プロダクトについてそのコンセプトや設計思想についてより深く理解しないと一概には解決方法を提示できない質問**だったため、同社のオフィスを訪問し、具体的にデバイスとアプリ・ソースコードも見せてもらいつつ、問題について議論しました。



取材： PC - People & Computer website

7月27日（水）の午前中、コンピューター関係専門のオンラインサイト「PC - People & Computer website」の記者より、取材を受けました。関わった日本のIoTプロダクトについて紹介しつつ、技術的な視点でいくつかの質問を受けました。

技術相談

午後のフリータイムを利用して、これからイスラエルでIoTスタートアップを立ち上げようとしている方達とホテル周辺のカフェで会い、技術的な質問や相談を受けました。



講演3: Sigma Labs / テルアビブ

7月27日（水）、テルアビブ市内のアクセラレータ Sigma Labs にてレクチャーを行いました。こちらでは他のイベントに先駆けて募集が開始されており、約80名の申し込みがあり、40名弱が参加されました。



イベントの告知ページで "Hardware & iOS Developers" と対象者が明示されていたので、本イベントではiOSのソースコードや開発環境についての前提知識が必要な話も入れ込みました。

（後から気付いたことですが、）本イベントの参加者は meetup.com の "Professional Embedded Soft. & Hardware IoT Makers" というグループのメンバーであり、それぞれが既にIoTの何らかのプロダクトのオーナーであったり、開発経験が豊富であったりする方が多いようです。そのためどちらかというとなBLEの解説自体よりも、紹介したプロダクトのコンセプトやユーザー体験の設計思想、もしくは開発体制等について興味を持たれる方も多く、他の訪問地・会場とはまた違った雰囲気・切り口のレクチャーとなりました。

また本イベントでは現地の方々のピッチ（短いプレゼンテーション）もあり、現地の方々のIoT分野における取り組みを知る良い機会になりました。



講演4: ビルゼイト大学 / パレスチナ

7月28日（木）、パレスチナに移動し、ビルゼイト大学にてレクチャーを行いました。



パレスチナではスマートフォンアプリケーション開発においてiOSは主流ではないとのことで、なるべくそこは抽象化しつつBLEを用いたアプリケーション開発について解説しました。

学生は既に夏休み中とのことでしたが、大勢集まり、熱心にメモを取る姿も見受けられました。また解説内に登場するプロダクトや開発に用いるデバイスの実物を持って行ったところ、レクチャー終了後に「これはどこで買えるんだ?」「いくらぐらいするんだ?」と前のめりで質問される方が何人かいました。

パレスチナではこういった他国のエンジニアの話を聞く機会はあまりないようで、またパレスチナに来てほしい、ぜひ一緒に何かやりたい、といったありがたいお言葉をたくさんいただきました。



(本講演のアレンジを行っていただいたビルゼイト大学の情報学科長のナワウダ先生、夏休みにも関わらず参加してくれた学生の皆様と)

まとめ

スマートフォンのアプリケーション開発は基本的に米国企業のプラットフォーム上に乗ったものであるし、今回の講演で紹介した日本の素晴らしいIoTプロダクトの数々も、私はフリーランスとして開発に携わったもののプロダクトオーナーではないので、果たして私が本事業にふさわしいのだろうか、日本の魅力をうまく伝えることはできるだろうか、という不安もあつたにはありました。

しかし実際にイスラエルやパレスチナに行ってみて、今ではその心配は杞憂であつたと思います。

イスラエルのテルアビブは「中東のシリコンバレー」と称される程IT産業が盛り上がっているところですし、エルサレムも負けず劣らず多くのITスタートアップやアクセラレータが立ち上がっています。パレスチナでも多くの若者がITに興味・期待をもって取り組んでいます。

そんなITの盛んな地で、今最もホットな分野であるIoT、そしてそのキーテクノロジーであるBLEを介して専門的な深い議論・交流を行えたことは、**現地の方々に遥か遠い日本を幾分か近くに感じていただくことに繋がつたのではないか**と思います。

また、今回（たまたまですが）「イスラエルのスタートアップ数社を日本のCEATECカンファレンスに招待し、日本企業とのビジネスマッチングを行う」という日本大使館が広報中の経済産業省のキャンペーンの応募締め切りと時期が被っており、私の講演テーマと合致しているため各講演でチラシを配布したところ、非常に多くの企業が興味を示し、即日応募してくれた企業もあつたようです。日本企業との協業や、日本のマーケットについて質問されることも何度もありましたし、私個人と協業したいという申し出がいくらかあつたことから、**「今後のビジネス展開に繋がる」という面でも成果があつたのではないか**と思います。

最後に、本事業の実現にご尽力いただいた外務省の皆様、各講演のアレンジから滞在中の移動や食事等全てにおいてお世話になつた在イスラエル日本国大使館の皆様、パレスチナ講演にご協力いただいた対パレスチナ暫定自治政府日本国政府代表事務所の皆様に、この場を借りて深く御礼を申し上げます。

【参考リンク】

- [外務省「日本ブランド発信事業」ウェブサイト](#)
- 堤修一 [ブログ](#)・[プロフィール](#)